

海外インターンシップ報告書

氏名：藤本光陽

所属：鹿児島大学農学部

渡航先：スリランカ

1. 参加目的

私が今回の海外インターンシップに参加した動機は、日本から飛び出して自分の殻を破りたいと思ったからです。私は自分の中に引っ込みがちなところがあり、海外という日本から離れた場所での自分改革をしたいと思ったのです。自ら進んで計画・実行・査定することが要求されるこのインターンシップで、自主性の重要性を学びまたそれに伴う行動力を身に付けたいと考えていました。そのために今回私は2つの目標を持って行きました。1つ目はセイロン島におけるコーヒー栽培・販売について学ぶことです。近年徐々にコーヒー生産が盛んになっているこの島での生産・プロモーションの過程を学び、生産者・消費者（輸出先）との繋がりについて考えたいと思っています。2つ目は現地の方との関わりを中心にして旅をすることです。その中で、チャレンジ精神や社交性を高めることが目的でした。

2. 大変だったこと辛かったこと

大変だったことは沢山あります。そのうちで最も大変だと感じたことは言葉の壁です。スリランカの公用語はシンハラ語ですが、基本的に英語が通じます。かと言って完全にスムーズな意思疎通とまではいかないもどかしい気持ちと共に、自らの能力不足に対する不甲斐なさを感じました。また、日々英語を話していく中で精神的に疲れてしまうことも辛かったです。

3. 楽しかったこと

逆に楽しかったことについても多くあります。何より思い出深かったものは、街中で出会ったタクシー運転手の方と一緒にキャンディの街を回ったことです。その日は偶然にも祝日だったこともあり代金はいらないよと言ってくれたり、一緒にご飯を食べに行ったりと、とても親切にしてくれました。そのほかにも街中で会う人の多くが気軽に話しかけてくれて、色々な人と繋がりが広がっていくことに嬉しさと楽しさを感じました。些細なことでもいうとあらゆる面での文化の違いにも面白さを感じました。例えばバスや電車の扉が常に開いていたり、クラクションが鳴り止まなかったりといったことです。実際にそれを目の当たりにするという貴重な経験ができたと思っています。

海外インターンシップ報告書

氏名：藤本光陽

所属：鹿児島大学農学部

渡航先：スリランカ



4. 達成できたこと

達成できたことの一つとして、コーヒーについての学びを挙げたいと思います。キャンディ市内にある“Natural Coffee”というお店の日本人店主、吉盛真一郎様とお会いすることが出来ました。お話を伺うと共に、珈琲豆の生産過程やスリランでの評価、日本との繋がりについてまで話し合い、今後のスリランカ産コーヒーの展望について考える機会となりました。帰国後も、持ち帰った知識・考えをもとに自分にできることがないか考え、それを実行していきたいと思っています。



5. 渡航前と渡航後の自分自身の変化

自分自身の変化の中で特に大きく感じるのは、チャレンジ精神が高まったことです。この「チャレンジ精神を高める」を渡航に当たっての目標に掲げて、それを達成するために現地の方々と英語というツールを用いて積極的にコミュニケーションを行いました。その際には、言語の壁や文化の違いにぶつかり何度も挫折しかけていましたが、その度に目標を再確認し、粘り強く行動し続けました。結果的に、そのような過程を通して「チャレンジ精神」というものが身についたように感じます。今後も、目標を見定めて挑戦し続けていきたいと思

海外インターンシップ報告書

氏名：藤本光陽

所属：鹿児島大学農学部

渡航先：スリランカ

います。

6. 現地での商品の反応

砂糖は入れないの？ 苦いね。といった反応がとても多かったです。実際に、スリランカの人々はミルクティーのような甘いものが好きなような印象がありました。緑茶のように苦味を楽しむという習慣・文化がないように感じます。一方で商品自体はとても喜んでいただきました。スリランカでは外国のものが良いという認識が多くあり、輸入品自体に対する抵抗は無いようでした。



7. 商品が現地で広まるためには、どうする必要があると思いますか

まずは、日本の緑茶というものを現地の趣味・嗜好に合わせる必要があると考えます。具体的案としては、6にもあげたように現地の方々は甘いものを好むためそれに合わせて、砂糖と合う緑茶（甘い緑茶）を提案します。実際、中国では甘い緑茶が親しまれておりそれを参考にするのもいいかもしれません。

8. 海外インターンシップを通して、あなたにとって「働く」とはなんですか？

私にとって働くとは、誰かの需要に答えてサービスを供給し、その対価として「お金」をいただくというものです。そのため、誰がどのようなサービスを欲しているのか。それに対して、自分は何を提供できるのかをこれからは常に考え続けていきたいと思っています。

9. 現地での活動を振り返って、感じたこと

今回の渡航を振り返って、強く感じたのは文化の多様さと、その素晴らしさです。スリランカはイスラム教と仏教が混合しているため、モスクと寺院、サリーと袈裟のように建物や衣服において非常にバラエティーに富んでいました。また「食」に関しては、食事の際は右手のみを使う、毎日カレーを食べるなど、日本人の私には考えられないことが多くあ

海外インターンシップ報告書

氏名：藤本光陽

所属：鹿児島大学農学部

渡航先：スリランカ

りました。これらのような文化の違いについてはトランジットで訪れた中国においても、もちろんスリランカにおいても強く感じる場面が多くありました。しかし、実際に現地でその文化に触れてみると、触れる前に感じていた嫌悪感や異質感は感じず、反対に異文化に関する興味が増えました。最後に、グローバル化が進む現代において異文化に触れること、学ぶことは、大変意義のあることではないでしょうか。今後は、今回の渡航を通して感じたこの気持ちを周囲の方々に共有していき、少しでも異文化に対する偏見や差別をなくすことに尽力していきたいです。